特100
774

白山謙致著

人生觀上の二大問題

第一講

278
208

始

特1
7

緒言

本書全體は、素是、先輩の指導に基いて、僅に佛教中の一班を窺ひたる者に外ならず、所謂述而不作的の文に、して、素より大方の識者に示すの意にあらざるなり。かゝる無用の文字を、世に公にするは、慚愧の至なり。雖、吾宗に常に行ふ所の、信仰告白に倣ひたる者にして、且つは先輩慈誨の恩儀を謝せんが爲にし、且つは更に示教を請はんと欲するの意に外ならざるなり。

大正4.4.21
内交

人世觀上の二大問題

目次

第一講　心的作用論……一
序論
第一章　世俗の所謂問題……一
第二章　根本的大問題……五
第一項　我れ是何物ぞ……五
第二項　我れの生じ來りたる由來……六
本論
第一章　佛教の教系……一一
第二章　先づ緣起の由來を探る……一三

本書本論上の第二「先づ緣起の由來を探る」といふ者は、尙數項の說くべき者ありと雖、今は其中たゞ一を擧げたるのみの者にして、他は之を第二講以下に說かんとする者なり。

謙致識

人生觀上の二大問題

白山謙致述

第一講　心的作用論

序論

第一章　世俗の所謂問題

吾人生れて此世に來り、五十年の生存を送らんとするに當て、研究せざる可らざる問題は、其數極めて多くして、實に枚擧するに遑あ

目次

第一項　惑業の所爲……一三
本論　下
第一章　佛敎の特色……一八
第一項　自己中心論……一八
第二項　自因自果論……二〇
第三項　無始無終論……二四
第四項　三世循環論……二七
第二章　到着すべき四個の結論……二八
第一項　三世論の故に現在主義破らる……二九
第二項　無始無終の故に斷見破らる……三三
第三項　因果關係の故に常見破らる……三三
第四項　自己中心の故に自ら修むるを要す……四〇

目次終

らざる程であるが、通常世人の認めて居る所の者は、蓋し衣食住の問題、若くは立身出世の其であらうと思はれる、先德曰く、衣食住は人間今生の一大事なりと、然り吾人は一日も身に衣服を纏ふことなく、又一日も食物を口にする事なくて、此世に存らへ得べきではない、加之、野蠻未開の民ならば知らず、苟も文明の空氣を呼吸し得たる者、一日も家屋なくして、常に山野にのみ露宿し得べきではない、此故に何人も、先づ工風を凝して置かねばならぬのは、此衣食住の問題であると、思はれる。

更に進んで其衣服も、成るべくは綾羅を纏ひ、錦繡を選み、食物は山海の珍味、住宅は大厦高樓をと思ふ上から、此に立身出世の道を

求めんと欲するに至るべきは自然の事でありて、此に更に職務の選擇といはるゝ問題が、研究せらるゝに至るのであらう、即ち商人たらんか、會社員たらんか、或は官吏たらんか教員たらんかと、此等の問題に就いて、大に工風を凝しつゝ、心一たび定まりたる上は、之を實現せんが爲に、或は智能を啓發し、或は身心を鍛錬するの必要を感ずるに至て、適宜、學校の教育を受け、幾多の學問を修め、後、更に實社會に出でゝ諸種の風波に遭遇しつゝ、一歩々々進み行くのであらう、さりながら、其間十中八九の人は挫折失敗して、或は憂愁の淵に沈むもあり、或は煩悶の底に陷るもあり、稀には目的を達し得たりとなして、意氣揚々たる人もありとはいへ、其等の人も

思の外に人世の無趣味なるに呆るゝが多く、自然深夜夢醒めて獨り之を思へば、何の爲に動いて此に至りたるかをも知ること能はずして、己自ら己が身を疑ふの思さへあるに至りて、結局、一生五十年之を夢の如くに送り、遂に一切を捨てゝ此世を去るに至るといふが、人世の常であると思はれる。

此を以て之を思ふに、衣食住の三は、實に人世に於ける最大問題であるとはいへ、たゞ此世に來りたるの後、生命を保たんが爲にするの方法手段に外ならずして、皆是枝末に亘るの細論であるとしか思はれない、此等よりも更に深刻に、痛切に、吾人の前に迫りつゝある所の、根本的の大なる問題があると思はれる、然り、大なる問題

があらねばならぬのである、若夫れ然らば、何者かこれ根本的の大なる問題であらうぞ、といふに、今之を左に說かんとするのである。

第二章　根本的大問題

第一項　我れ是何物ぞ

根本的大問題といはるゝ者は二ありて、其一は「我れ是何物ぞ」といふ事是であると思はれる、卽ち是所謂 what の問題といはるゝ所の者である、譬へば此に一の茶碗ありとせんに、此茶碗の體これ何物ぞと問ふたるに等しき者である、詳しく云はんに、此茶碗は、木に

依て造られたる者であらうか、或は鐵に依て造られたる者であらうかと問ふて居るのでありて、此者は木にもあらず、又鐵にもあらず、其體これ土なりといふが、卽ち其答となるのである、人は通例、「汝是何物ぞ」と問はるゝ時、「我は是人間なり」とまでは答へ得るとはいへ、更に、「其人間とは何物ぞ」といはるゝ時、多くは答ふる所を知らざるに至るのであると思はれる、あゝ何たる手ぬかりの事よ、これ己自ら己を知らざる者であると、云はねばならぬのである、今こゝに之を押へて根本的の問題といふのでありて、吾人は一日も疾く之を研究して置かねばならぬ譯であると思はれる。

第二項　我れの生じ來りたる由來

根本的問題の第二は、「我れの生じ來りたる由來」といはるゝ者、卽ち所謂 how の問題是であると思はれる、今之を前の如く、再び茶碗に就いて云へば、素と是土なる者が、如何にして此の如き形を取るに至つたであらうかといふの問である、詳しく云へば、其土は、皿ともならず、鉢ともならず、又は土瓶ともならず、花瓶ともならずして、何故にこの茶碗とは成り來りたであらうか、たとひ又茶碗となりたるにもせよ、何故に今少しく大なる形を取るに至らざりしか、又は何故に今少しく長け高き者となるに至らざりしか、その大なる者ともならず、その長け高き者ともならずして、特に今我前に在るが如き、此特種の形を取るに至りたる、因由來歷を聞かんと欲する

のが、この how の問題といはるゝ者である、今吾人の身が、何故に犬ともならず、猫ともならずして、特に此、人間といはるゝ身を持つに至つたであらうか、又何故に此の如く五尺の躰軀を持ち、何故に眼耳鼻舌を具へて、或は歩み、或は坐する底の、此生物となり來りたであらうかを、問はんと欲するのである、これ或は偶然であつたであらうか、或は又、斯く顯れ來らざる可らざる底の、必然的なる、或理由があつたのであらうかと、いふのである。

*　*　*　*　*　*

要するに、根本的の問題といはるゝ者は、一に what の問題、二に how の問題でありて、其中 what の問題は、體を問ふのであるから、

これは空間的の者であるし、how の問題は由來を問ふのであるから、これは時間的の者であるし、時間と空間とに亘れる此二大問題こそ、所謂根本的の者でありて、又實に吾人の寸時も捨置く事のならぬ、最急最要の、最大問題であると、思惟せらるゝのである。

*　*　*　*　*　*

而して此等の問題は、世の所謂科學の敎ふる所の者ではない、卽ち理學、化學、電氣學、測量學等の敎ふる所の者ではない、又彼政治學、法律學、農工商業學等の授くる所の者でもない、是非に宗敎若くは哲學の門に入て研究するにあらざれば、決して知る事能はざる底の問題である。

而して其所謂宗敎にも種々あり、其所謂哲學にも諸派の別るゝありて、古以來今日に至るまで、幾多の宗敎家、幾多の學者輩に依て、熱心に研究せられ、巨細に解釋せられつゝある者もありとはいへ、今は其等の者を一々捕へ來りて、之が批評を試みんと欲する者ではない、たゞ印度哲學といはれ、又宗敎中の宗敎と稱せられつゝある所の、佛敎の上より、之が解釋を承り、其敎を受けんと、欲するのである。

本論

上

第一章　佛敎の敎系

佛敎中には二ッの敎系がありて、一を實相論といひ、二を緣起論といふのである、其中、實相論といはるゝ者は、體これ何物ぞといふ問に答へて居るのであり、所謂 what の問題を解釋して居るのである、次に緣起論といはるゝ者は、如何にしてといふ問に答へて居るのであり、所謂 how の問題を說明して居るのである。

佛敎廣しといへども、此二大問題の解釋に外ならぬのであり、實

に其が佛敎の生命であり、又實に其が佛敎の全體であると、いひ得るのである。

第二章　先づ緣起の由來を探る

佛敎の二敎系中、先づ初に緣起論に依て、我れの生じ來りたる由來、並に現世界の顯れ來りたる經歷を尋ねて見やうと思ふのである。

さて其緣起論といはるゝ者にも種々ありて、業感緣起、賴耶緣起、眞如緣起、法界緣起、六大緣起等の區別がある、けれども實は孰れも皆、唯其緣起の主體を求めんが爲に、漸々深きを探り、遠きを尋ねて、進み行きたるに外ならずして、若も緣起の由來はといへば、

結局大小乘を通じて、之を惑業の所爲となすといふ事に歸するのである、注意せられよ此惑業といふことを。

第一項　惑業の所爲

諸種の緣起論の中に於て、特にこの惑業といはるゝ者の說明をなしつゝあるのが、所謂業感緣起論であるから、自らこゝに其說明をなす譯となるのであるが、今こゝに惑といふは何ぞやといふに、これ心的作用を指すの名である、吾人の心的作用は、正確なる者ではなくて、迷妄的の者である譯から、之を名けて惑といふて居るのである、而して惑一たび起る所に、其處に或運動を起すに至る、此運動これを名けて業といふのである、業といふのは梵語の「カルマ」の譯

語でありて、事業、所業、職業等の業字と其意を同ふして、所謂吾人の所作、日々の行爲を指すの名である、吾人の所作、日々の行爲たる、この業なる者は、所謂惑と名けらるゝ迷妄的の心的作用より起り來る者でありて、此惑と、此業との二ッが、所謂緣起の原因となり、終に今日の吾人の此身を產み出し、又終に吾人の生息しつゝある此種の世界を生ずるに至つたといふのである、聞く彼海月(くらげ)といはるゝ者が、頭もなく、尾もなく、又手足もなく、唯ふはりとしたる一物であるに、而も其が生物である譯から、諸種の心的作用を起すのでありて、若も己が身邊に或食物の浮べるあるを知り、之を食はんと欲するの思を起すに至る時は、食物の所在に隨て或は右方に、

或は左方に、適宜身體の一局部を伸長せしめて、其食物の所に達し、之を捕獲し來りて、己が體中に收むるに至るといふ事である、斯くして此種の手數を幾度か繰返し、長き經驗を重ねつゝ、子々孫々相傳ふるに至る時は、遂に其處に海月は、一種の手を持ち、一種の足を具ふるの生物たるに、至るべき譯であるといふ事が、推論せらるゝとの事であるが、吾人の身體亦同樣なるべき譯でありて、吾人生起の由來も、亦此の如くあつたといふのである、卽ち吾人の心的作用が手あるべく欲し、足あるべく希ひ、眼あり、耳あり、鼻あり、口あるべく念じたるの結果、遂に、終に、吾人の現に今持てるが如き此種の形體を具ふるに至つたといふのである。

吾人は此の如くして先づ吾人自身の體形を確定し、更に其者に依て行ふ所の事業所作、素是、惑といはるゝ迷妄的の心的作用より、顯し來る事とて、何れも皆惡業ならざるはなき譯より、其結果は是苦といはるゝ者たるに至りて、吾人今日常にその苦を嘗めつゝあるといふのが、佛敎の敎ふる所でありて、これ實に業感緣起論中に說かれてある所の者である、手近く譬へて云はゞ、貪るてふ心的作用より、强窃盜てふ惡業を働き、遂に監獄に捕はるゝてふ苦果を招くといふが如き是である、而して又監獄に捕はるゝや否や、更に又他の惑を起し、以て業を造り、以て苦に陷るに至るのである、譬へば我れ、彼處に盜みをなせるの時、或種の注意を怠り、或種の拙策を行

ひたりしを以て、今は此の如く縲絏の辱を受くるに至りたり、次回に於ては此に大に注意を拂ひ、更に一層の巧みを加へんと欲す、而してこれに先ちては看守の目を偸み、疾く此監獄を遁れ出でざるべからず、其が爲には、此處よりせんか、或は彼處よりせんか抔、諸種の惑を起し、尋て之を實行すべく無謀なる惡業を身に顯し、事顯れて更に嚴罰を蒙るの苦に入るが如く然る者である、夫れ此の如くして、吾人は常に此惑と、此業と、此苦との三道を、迚りつゝ、遠き無限の古の時以來、今日今時に至るまで、流轉暫くも已むことなかりし者であつたといふのである。

本論

下

第一章　佛教の特色

論じて此に至るに、吾人此に大に注意せざる可からざる諸點があるといふ事を、知るに至るのである、今試に之を擧ぐれば、凡そ左の如くであると思はれる。

第一項　自己中心論

佛教の特色の一は、其緣起論が、自己中心論であるといふ事是である、思ひ回らせば、佛教以外の何れの教に聞くとも、緣起の原因を、自

己以外の物、卽ち外界に於ける何物かに之を求めざるはないのである、試に看よ、儒教に於ては、太極、兩儀を生じ、兩儀、三才を生ずと敎えて、三才といふは天地人の三をいふのであるから、此三蓋し是萬物の別名であるといひ得るのである、而して此萬物を生じた る者を陰陽の兩儀となし、其兩儀を產みたる者を太極と名くるのでありて、繰返して云はゞ、太極が一切の親元であるといふのである、道敎に於ては、この太極に替ゆるに大道を以てしたのでありて、大道、元氣を生じ、元氣、天地を生じ、天地、萬物を生ずと敎えて居るのである、又彼印度に行はれたりし婆羅門敎の云ふ所を聞かば、之を梵天よりといひ、若又之を基督敎に問へば、エホバと名くる獨

一眞神の創造に依るのであるといひ、希臘哲學の鼻祖と云はれたりしタールレスに質せば之を水よりといひ、同時代に於ける他の哲學者に尋ぬれば、之を火よりといひ、又は之を空氣よりといひ、或は又地水火風の四よりといひたる者もあつたのである、孰れにもせよ、天地の本源、萬物の親元を、外界に於ける或物の上に之を求めざるはないのである、然るに佛敎特り之を取らず、孰れも皆己が心的作用に依れるの結果であると敎えて居るのは、慥にこれ一の特色として、數へらるべき者であると思はれる。

第二項　自因自果論

佛敎の特色が自己中心論である上から、隨て又自因自果を說くを以

て、其特色とすると云ひ得るのである、卽ち何事も何物も、太極、大道、梵天、エホバ等の仕向けに依るといふでもなく、又は之を閻魔法王若くは阿房羅刹等の差圖に依るといふでもない、孰れも皆、自ら招ける因果關係の然らしむる所であつたといふのである、此故にたとひ如何ふる不幸に陷ることありとはいふとも、其が爲に、神を恨むの思があるでもなければ、又他人を嫉むの思もあるではないのである、譬へば我に盜心あるが故に、警察官あるに至り、更に又監獄署あるに至りたりといふが如く然る者でありて、之を或は政府の所爲となし、或は之を建築技師の意樂に依るとなして、以て政府を恨み、又は以て建築技師を憎むに至るが如きは、これ大なる誤解であるといふの

である、要するに何事も、自ら招いて自ら受くるてふ、自因自果の理に依るのであるといふのが、佛敎の敎ふる所であつたのである。然るに之に反して、他敎の敎ふる所は、孰れも皆他因自果を說ける者であつたと知らるゝのである、卽ち譬へば、神の如き他因より、我と云はるゝ此一物造り出されて、其上此者の常に受けつゝある所の果報は、凡て皆之を神より與へらるゝに依るのであると、敎ふるが如き是である、盖し是原因を、外界に於ける神の手許に之を眺めて、其結果を、此處に於ける吾人の身の上に之を眺めやうといふのでありて、これ之を他因自果論と云はねばならぬのである、若夫れ吾人一たび此敎の上に信仰を置くことあらんか、吾人は神に對して

或質問を試みんと欲するの思あるに至らねばならぬのである、卽ち神は何故に彼にのみ厚くして、我にのみ薄かりしぞといふこと是である、さりながら神は其に對して、更に答ふる所はない筈である、此に於てか、或は祈禱を捧げ、或は供物を献じて、以て神意を和げんと欲する思あるに至り、斯くして何等かの恩寵に浴せんことを希ひつゝも、其處に何等の應現をも見る事能はざるに至る事あらんか、乃ち煩悶を起し、苦痛を感じ、更に厭世の思想を起して、遂には己が死所を見出さんと欲するの思さへあるに至らざるを得ないのであると、思はれる、たとひ此の如くなるに至らずとするも、平素戰戰兢々として不安の念に驅られつゝ、心暫くも安穩なる事能はざる

べき譯であると思はれる、是に依て之を思ふに、神てふ思想は、決して吾人を落付かせ得る者でもなく、又決して吾人を慰め得る者ではないと思はれる、是實に佛敎の信徒等が、唯感涙に咽びつゝ謝恩の意を表せんが爲に、喜んで佛に對しつゝある者とは異り、其間實に天地の相違あり、雲泥の區別ある者と思はるゝのである。

第三項　無始無終論

佛敎の特色の第三は、無始無終論であるといふ事が出來る、試に他敎の敎ふる所を眺むれば、孰れも皆第一原因以下の有始有終論であると思はれる、譬へば萬物創造の神を認めて、之を第一原因となし、萬物皆これより來ると說いて、之を一切の始となし、末日の審判な

る者を以て、之を一切の終となし、其時を以て世界の滅盡となすが如き是である、佛敎の敎ふる所はこれと異り、何れの時を始といふでもなく、又何れの時を終といふでもない、譬へば鷄の前に卵あり、其卵の前に又鷄ありて、過去の何れの時にまで溯るとも、決して其始を認むること能はざると同時に、又未來を眺むれば、鷄の後に卵あり、其卵の後に又鷄ありて、何れの時に至るとも、遂に其終を押ゆること能はざるが如き者であるといふのである、然るに世には、親子丼と名くる食物ありて、其處にて鷄肉と卵とが、相共に煮込まれてある、察する所、鷄を親とし、卵を子と見做したる者であらうと思はれる、是一應承認せらるべくありとはいへ、實は其親と見ら

れつゝある所の者も、又その、子と名けられつゝある所の者も、共にこれ常恒の親でもなければ、又永久の子でもあるのではない、看よ其鷄も、今は親と云はるとも、其者の前身なる卵の上より、之を眺め來らんか、これ之を子といはねばならぬ譯となり、又其處に、今は子と云はるゝ卵なる者も、若之を其者の後身たるべかりし雛鳥に較ぶる時は、是之を親と云はねばならぬ譯となるではないか、然るに之をこれ思はずして、其前身、而も過去幾多の前身あることを忘れ、其後身、而も未來幾多の後身あることを鑑みずして、漫りに過去を切り捨て、無意義に未來を捨て去り、唯僅に中間に遺れる二個を捕へ來りて、之を兩々相對せしめ、以て此に親子の名を與へ、

其親を一切の始の如く扱ひ、其子を凡ての終の如くあしらふて居るのは、これ未だ理を盡さゞるの、致す所であると、いはねばならぬのである、佛敎以外の諸宗敎が、無始無終の理を知らずして、たゞ第一原因以下の、有始有終論を唱へて居るのは、恰もこの親子丼に似たるの敎でありて、未だ眞理を辨へざるの、致す所であると、云はねばならぬのである。

第四項　三世循環論

他敎に敎ふる所は、有始有終論であるから、之を圖解するに、恰も一の短き直線の如く、忽爾として始を起し、忽爾として終を告ぐるに至る底の者であるに、佛敎に敎ふる所は、無始無終論でありて、

尙又其が恰も圓周の如く然る者である、卽ち全圓に渡りて其定まれる始あることなく、又其定まれる終あることなく、回轉之を幾度すといふとも、終に究極する所あることなく、自ら無限永恒の長きに亘るべくありて、而も其處に常に、絶えず惑は萠へ來りて業を起し、業より牽かれて苦に入り、更に又惑より業に、業より苦に陷りつゝ、惑業苦の三道を順次に辿りて、循環常に已むことなく、長へに三世に渡ると、いふのである。

第二章　到着すべき四個の結論

論じて此に至るに、自ら四個の結論に到着せざるを得ないのである、

卽ち左の如くであると思はれる。

第一項　三世論の故に、現在主義破らる

世に現在主義といはるゝ者がある、此者や、別段組織せられたる學說があるといふでもなく、隨て又左程深く論ずべき程の價値のある者でもないが、世俗の間には隨分此種の思想を懷きつゝある者も甚だ多い譯でありて、つまり過去を考ふるでもなく、又未來を思ふでもなく、たゞ人生五十年の現在一世をのみ眺めて、此一世の上に於て、あらゆる快樂を嘗め、あらゆる欲望を充して、こゝに凡ての計算を終らんとするのを云ふのである、其云ふ所甚だ無邪氣ではあるが、此複雜なる人生の上に在て、到底此の如く簡單なる希望の達せらる

べき筈はないのである、蓋し桃栗三年、柿八年といはれつゝあるが如く、何事も何物も、諸種の事情、幾多の關係の纏綿せるありて、今日植付けたる種子が、必ずしも今日實る譯の者であるではないといふ事を、味ひ得たる時は、多少の猶豫を與へて、或時期の來るを靜に待つ底の覺悟がなくてはならぬのである、然るにこれをこれ思はずして、所謂現在主義の人は、過去を考へず、未來を思はず、卽座に總勘定を爲さんと欲する譯から、一々の事物を判ずるに當て、常にそが前後の關係を見誤り、又其差引を間違へ、其結果、餘りに計算の合せざるに驚かしめらるゝに至るが、自然であると思はれる。

斯くして若夫れ此等の人、僅に一歩を誤ることあらんか、實にまた

彼數理をも疑ふに至るでもあらうと思はれる、卽ち何事も數理の然らしむる所なることを忘れて、凡て皆偶然的の者なり、まぐれ當りの者なりとなすに至りて、其處に放逸無慚に陷るの虞あるのみならず、更に又社會の差別相を咀ひ、人世の秩序を嫌ひ、遂には惡しき意味に於ける社會主義をさへ唱へんと欲するに至りて、所謂危險思想に陷ることなきを保せざる者であると思はれる。

佛敎中に過去と現在と未來との三世を說きて、順現業、順次業、順後業等の事をさへ、詳說しつゝある者、蓋し、如上の誤解なからしめんが爲にする者でありて、此敎に依てこそ、かの顏回の夭死をも說明せられ、又かの盜石の長壽をも解釋せらるゝに至るのであると

思はれる、吾人は決して、現在主義を懷いてはならぬのである。

第二項　無始無終の故に斷見破らる

斷見といふのは、われ此に死する時、われ乃ち絶ゆるといふ見解である、世の中には隨分此種の見解を懷いて居る人もある樣であるが、如何にしても有が無に歸する筈もなく、無が有となるべき譯もなく、有は飽迄も有にして、無は飽迄も無なるべく論定せらるゝ以上には、吾人なる者業に既に此に有るなるに、此者忽然として急に滅し、又は急に生ずる底の幻影なるべく信ずる能はずして、其先を尋ぬれば、實に過去の古、否、遠き無始の昔より來りたりし者なる事を、承認せざる可らざると同時に、又未來を云へば、實に無終の末、永恒の

終に至る迄も、決して死する事能はずして、常住不斷に活き存らへつゝあらねばならぬ我身なるべく、知らねばならぬのである、然り此故に吾人は、假令此世に首を縊り、或は海中に身を投ぐるに至り、又は切腹して自殺を企つる事ありといふとも、わが奥の院たる者、又は我主體といはるゝ者、卽ち我れ其自身なる者は、遂に決して死するの時ある事なかるべき譯である事を、知らねばならぬのである、此故に彼斷見者流の如く、我肉體此に死するの時、われ乃ち絶ゆるてふ見解の、實に誤謬なりし所以を、大に悟らねばならぬのである。

第三項　因果關係の故に常見破らる

常見といふのは、我は現に今人間なるが故に、たとひ今此に死する

事ありと云ふとも、死後亦永久に人間として繼續するといふの見解である、試に問はん、その我はこれ人間なりてふ斷案を、果して何處より引出し得たるかといふ事を、恐くはこれ、唯己が姿の上、又は唯己が形の上より見込み來りたる、一の獨斷に過ぎざる者であらうと思はれる、若夫れ然らば、彼總理大臣も其姿の上より是人間なりといはれ得べく、又彼乞食者も其形の上に於て、同じくこれ人間なりといはれ得て、兩者相共に人間なるからは、其價値に於ても、更に高下の別のあるべき筈なしと論定しつゝ、早速に其總理大臣を免職せしめ、直に其乞食者を推薦して、之を總理大臣たらしむるも、差支なしといひ得るであらうか、又彼文學博士も其姿の上に於て人

間なり、かの立ちん坊も其形の上に於て人間なり、相共に人間であるといひ得る譯から、立ちん坊をも推薦して、其儘に之を文學博士となす事を得と、いひ得るであらうか、否な決して斯く爲すこと能はずといふ所以の者は、蓋しこれ姿の上に於ける直打ではなく、又單に形の上に於ける價値でもなくして、全くこれ心の上に於ける其であると知らねばならぬのであるではないか、若夫れ果して然らば、世には人面獸心といはるゝ一種の生物ありて、之を姿の上より論ぜば、慥にこれ人間といはるゝなるにもせよ、若も一たび之を其心の上より眺めんか、是非に之を下等動物の群中に加へ込まねばならぬ樣なる者もあるのである、夫れ斯くの如くして、今こゝに嚴密に、

個々の心的狀態を調査する事あらんか、十人十色、百人百色、千人千色、萬人萬色ありて、或は高きもあり、低きもあり、或は淨きもあり、濁れるもあり、或は磨かれたるもあり、磨かれざるもあり、之を人間として扱ひ得べきもあり、斯く扱ひ得べからざるもあり、又其斯く扱ひ得べからざる者の中に於ても、千萬無量の階段あるべく知らるゝと共に、又其斯く扱ひ得べき者の中に於ても、多百千種の區別あるべく推せらるゝであるではないか、而して又其各個の價値、日々に變化し、刻々に動いて已まざるべくありて、或は進步發達する者もあるべく、或は退步墮落する者もあるべく、其一々が皆各自の日々夜々に積み重ぬる、善惡二業の因果關係に基く者であるとす

れば、吾人現に今、其姿の上、又は其形の上に於ては、たとひ人間と云はれ得ればとて、永久に、常恒に、能く人間であり得るの、又は決して人間以下に下ることはないの、或は人間以上に上る事もないの、抔と斷言し得べき譯の者ではないと、知らねばならぬのである、要するに常見者流の主張するが如く、人間は常に人間なりといふ見解も、又これ一の誤謬に陷れる者であつたといふ事を、知らねばならぬのである。

* * * * * *

夫れ斯くの如くして吾人は、一に現在主義は破られ、二に斷見は斥けらるゝ所に、吾人永久に死ぬるの時なき事を知り得て、大に喜の

思を起し得たる譯であると同時に、又三には常見の破らるゝ所に、人間常に人間ならずして、千萬無量の變化を受くべきの理あることを、味はしめられて見れば、吾人此に大に戒愼せざるを得ざるの譯合ある事を、敎えらるゝに至つたのである、若夫れ吾人慥に、人間以上の者に變化し得るの見込ありとすれば、大に安心の思ありとはいへ、或は人間以下の狀態に、下らしめられざるを保せざるの譯ありとすれば、此に大に胸を痛めざるを得ざるに至るのである、兵法に曰く、其來らざるを恃むことなかれ、吾に待つあるを恃めと、吾人常に何等かの覺悟を定めて、所謂吾に待つあるを恃むの思を、持つて居らねばならぬのである、然るにこれをこれ思はず、何等の備

へをもなすことなくして、空しく月日を送り去る所に、若も不意を打たるゝ事ありとせんか、必ず大に失敗せざるを得ざるに至るべくある事を、知らねばならぬのである、人能く千金の璧を碎く底の勇氣ありといへども、聲を破釜に失することなき能はざる所以の者は、蓋し覺悟を持たぬに由るのであり、又能く猛虎を搏にする底の度量ありといへども、色を蜂蠆に變ずることなき能はざる所以の者も、畢竟、不意を打たるゝに由るのであると思はれる。

若夫れ然らば、吾人如何に覺悟をなさんかといふに、佛敎の敎ふる所に依らば、唯次の項目、卽ち第四の結論に到着せざるを得ざるに至るのであると、思はれる。

第四項　自己中心の故に、自ら修むるを要す

世人は災害に出遭ひ、病魔に侵され、苦痛に沈む等の事ある時には、必ず愚痴をこぼし、不平を洩し、泣き言を云ひ、又屢、夫婦喧嘩をなし、嫁と姑と相爭ふに至るのみならず、或は朋友を恨み、知人を嫉み、國家を咀ひ、時勢を謗り、時ありては之を神明の所爲となし、又は之を佛陀の仕向けとなし、或は祈誓を籠め、又は願掛けをなして、周章狼狽、措く所を知らざるに至る者も、ある樣に見ゆるのであるが、これ實に己が手許を忘れて、罪を他に嫁する者でありて、誠に憫むべきの至であると思はれる。

凡そ其向上進歩する所以も、又其向下凋落する所以も、皆是自ら招

ける、業報の然らしむる所であると知らるゝからは、其榮ゆるに當ても、自ら喜ぶべくあると共に、其凋るゝに當ても、自ら戒めつゝあらねばならぬのであつたのである、若夫れ他の人の榮ゆるを見ることあらんか、これ即ち他の人の招ける所であると知られて、これを見ては其用意の周到なりしを、敬慕するの思あるに至らねばならぬと共に、己も亦其表示に學ぶ所ありて、大に勤めんと欲するの思あるに、至らねばならぬのである。

斯くの如くして、各人各個に自己の問題を、自ら解釋せざるを得ざる譯でありて、是ぞ何人も動かすこと能はざるべくある上に、其が又長へに過現未の三世を貫ける大法則であつたと、知らねばならぬの

である、此を以てか吾人は、各個に己が問題を自ら解釋しつゝ、依て以て自己を救はねばならぬのである、然り己自ら己を救はねばならぬのである、此故に甚だ不實には似て居るけれども、親の問題は親の問題でありて、子たる者が之を解釋することもならず、妻子の問題は妻子の問題でありて、夫たり親たる者が、之を解釋することもならぬ樣に、なつて居るのである、あゝ親は親自身に、妻子は妻子自身に、各々自己の問題を、自己が解釋せねばならぬのである、自己が之を解釋する所に、自己を救ふことを得るのでありて、之を怠る所に、自己を惡道に陷るゝに至るのである。

此に依て之を思ふに、吾人は唯只管に、自己を救ふの道を講ずべく

ありて、人の己を謗ると笑ふとに、頓着しつゝあり得るの餘裕があるではない、人の謗ると笑ふとは、人の上に於ける問題でありて、我に關するの問題ではない、殊に吾人は、人に依て如何に讚められたればとて、己が直打の上がる譯の者であるでもなければ、又如何に罵られたればとて、我價値が傷けらるゝ譯の者であるでもない、譬へば壹圓の紙幣は徹頭徹尾壹圓たるべき譯でありて、たとひ之を如何程賞讚したればとて、或は又たとひ如何程之を踏み付けたればとて、其等に依て更に其價値を改めざるが如く然る者である、吾人は飽迄も、世の毀譽褒貶より超絶し去つて、只管に自己を磨くべくあるが、實に急務中の急務、最要中の最要であつたと、知らるゝので

ある。

＊　＊　＊　＊　＊

以上、これを佛敎中に業感緣起論と名けて居るのである、蓋し吾人幷に世界の緣起し來る所以を、惑業の所感に由るといふの、趣意であるからである、今は之を第一講として、これを心的作用論と名けたのである。

人世觀上の二大問題第一講終

278
208

複製不許

大正四年四月三日印刷
大正四年四月廿六日發行

著作者　東京市芝區三田北寺町　白山謙致
發行者　東京巢鴨町二丁目三五　原子廣宣
印刷者　東京市本所區番場町四番地　守岡功
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京巢鴨町二丁目三五　無我山房
振替東京三一二二番

終